Gulliver's Travels に見られる老い

― 記憶力の衰えを中心に ―

山　内　暁　彦

序

Jonathan Swift の *Gulliver's Travels* には、老年のかかえる問題を目立った形で扱った部分が所々に見られる。例えば、裁判官についての諷刺の中で "[T]hese Judges are Persons appointed to decide all Controversies of Property, as well as for the Tryal of Criminals; and picked out from the most dextrous Lawyers who are grown old or lazy" (IV, v, 241)「裁判官は財産をめぐるすべての紛争、罪人の審理について結論を下すため、年老いてものぐさになっているもっとも腕の良い法律家の中から選ばれる」と述べられている。[1] また、大臣について、"[I]t is a general Complaint that the Favourites of Princes are troubled with short and weak Memories" (III, vi, 180)「君主の寵臣といった連中は、決まって物覚えが悪いという不満もよく耳にする」と述べられた箇所でも、老人特有の記憶力の衰えが攻撃の対象になっている。

これらの箇所は、老人である裁判官や大臣に対するかなり辛辣な諷刺であるが、裁判官や大臣に限らず、人は誰しも加齢とそれに伴って現れてくる心身の不調や社会生活上の問題から逃れられないものだ。本作品で作者スウィフトは、このような人類共通の老化の問題に対しどのように向き合っているだろうか。また、作品の登場人物ないし執筆者として設定されているガリヴァについてはどうだろうか。本論では、スウィフトとガリヴァの語学力と記憶力を中心的な題材として、書物や読書に対する考え方と関連させつつ、老化に伴って現れる代表的な現象のひとつ、記憶力の低下の問題を取り上げて考察する。さらに、これに加えて老化が表面化しやすい身体の運動能力にも言及する。そして、我々が人としていかに老化の問題に向き合って行けば良いかについての示唆を作中に見いだす試みを行ないたい。

I

『ガリヴァ旅行記』において老年にともなう不具合を扱った部分として特に

有名なのは、第３篇中のストラルドブルグの記述であることは言うまでもないであろう。この部分は、いろいろな要素が雑多に集められて成り立っている『旅行記』第３篇の中でも、とりわけ読者の印象に強く残る部分の一つである。ガリヴァは、ラグナグ国には生まれながらにして永遠の人生を約束されたストラルドブルグと呼ばれる人々が存在しているということを聞き、大変感激し、彼らを羨み、もし自分がストラルドブルグとして生まれたならどのようにして人生を過ごして行きたいか様々な夢想にふける。それだけでなく、ガリヴァは以下のように自分の夢を現地の人々に熱く語る。

> [I]f it had been my good Fortune to come into the World a *Struldbrugg*; as soon as I could discover my own Happiness by understanding the Difference between Life and Death, I would first resolve by all Arts and Methods whatsoever to procure myself Riches: In the Pursuit of which, by Thrift and Management, I might reasonably expect in about two Hundred Years, to be the wealthiest Man in the Kingdom. In the second Place, I would form my earliest Youth apply myself to the Study of Arts and Sciences, by which I should arrive in time to excel all others in Learning. Lastly, I would carefully record every Action and Event of Consequence that happened in the Publick . . . I would exactly set down the several Changes in Customs, Language, Fashion of Dress, Dyet and Diversions. By all which Acquirements, I should be a living Treasyry of Knowledge and Wisdom, and certainly become the Oracle of the Nation. (III, x, 201)
>
> （もし幸運にしてストラルドブルグに生まれついたなら、生と死の区別を知り、我が身の幸せに気づいてすぐにありとあらゆる知恵を絞り、手段を尽くして財産を築く。倹約に励み、賢く運用して行けば、200年ほどのうちに王国一の大富豪になるに違いない。次に大切なのは、幼い頃から様々な分野の学芸に励み、やがては抜きん出た大学者になることだ。最後に、世の中に起きた出来事をすべて詳細に記録し・・・習慣、言語、流行、服装、食事、娯楽の変遷についても詳しく記録を残しておけば、生きた知恵の宝庫として、国家を導く賢人となれるに違いない。）

しかし、ガリヴァの話に暫し黙って耳を傾けていたラグナグ人たちの様子がどうもおかしいことにガリヴァは気づく。

> When I had ended, and the Sum of my Discourse had been interpreted as

before, to the rest of the Company, there was a good Deal of Talk among them in the Language of the Country, not without some Laughter at my Expence. (III, x, 202-03)

（ようやく話をしめくくり、その大まかな内容が通訳されて他の皆に伝わると、その場にいた人々はまたしても自国語で何やら話し込み始めた。中には、私を見て声を上げて笑うものさえいた。）

人々の失笑の理由は、この後すぐに明かされる。彼らにとってガリヴァの言葉は、根本的な勘違いから来る戯言に過ぎない全くの不可能事なのであった。現地の人々にストラルドブルグの現状を説明され、その後、実際にストラルドブルグに面会した機会に、彼らの実像を目の当たりにして、ガリヴァの熱情はすっかり冷めてしまう。一言で言って、ガリヴァの勘違いの原因は、〈永遠に生きること〉と、〈永遠に若いままでいること〉とを同じこととして理解していたことにある。そうではなくて、ストラルドブルグは、〈老い続けながら永遠に生き続ける〉宿命を負わされているのである。

その無残とも悲惨とも言うべき姿をここで一瞥してみよう。彼らの性格は、頑固で気難しく、強欲、陰気、ひとりよがりである。記憶力に乏しく、若い頃に学び覚えたことしか記憶には残っていない。90 歳になると歯も髪も抜け、味覚もなくなるが、食欲に関係なくただ飲み食いを続けるのみ。体の良い物乞いとして何か記念品をくれとせがみはするが、人の話に興味はない。こうした姿は、かなり誇張されているとは言え、老人一般に見られる老いの醜さをよく捉えていると言って良いであろう。ガリヴァ自身も、"I thought this Account of the *Struldbruggs* might be some Entertainment to the Reader, because it seems to be a little out of the common Way." (III, xi, 207)「ストラルドブルグの話は、少し普通でないようだから、読者にとっても何かの気晴らしになったであろう」と控えめな表現でこの体験の珍しさを我々に伝えているが、実際にはその内容は「何かの気晴らし」と言うには大変強烈なものであった。

ストラルドブルグの老いの恐怖を描いてとりわけ秀逸なのは、記憶力がないので読書をしても一向に楽しくないというくだりだ。彼らの記憶力は、文章一つ分ももたないというのである。読書ができなくなるということは、少しでもその楽しみを知っている者たちにとって等しく辛いことと思われるはずである。従って、これは、読書好きの人々と同様に、特に読書好きという訳ではない多くの人々にも共通する不安であり恐怖であると言っても過言でない。記憶力は、読書のために必要であるばかりでなく、日常生活を円滑に送る上でも必要不可欠な能力の一つである。それが日々失われて行くのを感じることは、老化の悲

しみを感じることと直接つながっている。作者スウィフトが、記憶力の低下に伴って読書の楽しみをなくしてしまうことへの恐れを自分自身の問題として切実に感じていたとすれば、ストラルドブルグが読書を楽しめないということについての記述には、スウィフト自身の心情がにじみ出ていると言えるかも知れない。

恐らくはスウィフト自身も読んでいたであろう、ユウェナリスの『諷刺詩』の中にも、老年の災いは縷々語られている。[2] その中の記憶の低下について述べられた箇所は以下のようになっている。

> けれども手足のどんな損傷よりもひどいのは呆けであって、奴隷たちの名前も、過ぎし日夕食を共にした友人の顔も、自分が生んで育てた息子らも、誰だか分からなくなる。それというのが、情容赦もない遺言状によって（呆け老人は）息子たちが相続人であることを認めず、全財産が（惚れた遊女の）ピアレーのところへ行っちまうのだ。長年低い門構え（の売春宿）に立ってきた手練手管の女の吐く息にはそれほどの力があるのだ。[3]

この部分の後半の財産に関わる記述では、老人でも性欲を失わずにいることが哀れむべき事柄として挙げられている。この視点はスウィフトには見られないものであるものの、記憶力が失われるに伴い、判断力までが失われてしまうという、老人に特有の症例のひとつとして捉えることができるだろう。問題は、むしろ、上の引用の前半部分である。老人が肉親や友人の顔を忘れてしまい、「どちら様ですか？」などと尋ねる光景は、現代の日本でも一般の家庭や養護老人施設等の中で日々見られるものになっていて、老人の「呆け」は決して珍しい事柄ではない。我々が人類に共通する問題として向き合って行くべき事柄である。

諷刺の役割は何であるかという大きな問題を考えながら、個々の作品なり個々の諷刺家なりを取り扱う際には、このような普遍的な問題意識をその作品で作者がいかに取り扱うことができているか見極めようという姿勢を持つことが肝要だ。ストラルドブルグを描いた『ガリヴァ旅行記』の当該箇所は、それだけを独立させてみても独自の存在感を持つのではないかと思えるほど、老年の抱える問題という古来よりある普遍的な問題を、読者をして驚愕せしめる程に大変極端な形で提示し直したという点にその意義がある。四方田犬彦の言を借りれば、「ストラルドブルグにあっては、死は恐怖であるばかりではない。死にすら到達できない陰惨な生そのものが、すでにして恐怖であり、歴史に記録

されるべき凶事」なのだ。[4]

ストラルドブルグはこのように強烈な存在感を持っている。従って、読者の注視はもっぱらストラルドブルグに向けられることになる。そのためもあって、この部分のガリヴァの役割は、いわゆる狂言回しのそれであるに留まっている。まず、その前半では、実情を知らぬまま都合のいい解釈をしてしまう愚者の役割をガリヴァは担わされていた。また、後半では、客観的な観察者として読者とともにストラルドブルグの実情に驚愕しつつ彼らを嫌悪するに至るという役割を担わされていたと言える。では、ガリヴァ自身にとってのストラルドブルグ体験はどのような意味を持っていたと考えられるだろうか。結論から言えば、ガリヴァ本人はこの体験を経て生への執着心をあまり抱かなくなったのだと言えよう。ガリヴァは老年の抱える問題を自らの問題として捉えた上で、それに対する一定の解決を得ることができたに違いないとの解釈ができるのではないだろうか。そして、この一連のエピソードを創作した真の作者スウィフトにとっても、事情はやはり同じなのではないだろうか。"The Reader will easily believe, that from what I had heard and seen, my keen Appetite for Perpetuity of Life was much abated." (III, x, 206)「話を聞き、目で見た結果、永遠に生きたいという私の切なる願いが冷めてしまったのも、読者にはたやすく理解してもらえるだろう」とのガリヴァの言葉は、スウィフト自身に向けられていたとも言えるだろう。そして、ストラルドブルグと対極にあるような、生への執着のないフウイヌムの死に方を、次の第４篇「フウイヌム国への渡航記」でスウィフトは我々に具体的に提示して見せる。

> If they can avoid Casualties, they die only of old Age, and are buried in the obscurest Places that can be found, their Friends and Relations expressing neither Joy nor Grief at their Departure; nor does the dying Person discover the least Regret that he is leaving the World, any more than if he were upon returning home from a Visit to one of his Neighbours. (IV, ix, 266)
>
> (もし、不慮の事故に遭うことがなければ、フウイヌムはみな老衰によってこの世を去り、できるだけ目につかない場所にひっそりと葬られる。息を引き取るという時にも、友人や縁者はとりたてて喜ぶでもなければ、悲しむでもない。死に行く者自身、この世を去ることをさして嘆いている様子はなく、隣人の家を訪ねていて、そろそろお暇しようかと帰り支度に腰を上げるという風情なのだ。)

死に対するフウイヌムの感性や態度がこのようなものであることから、フウイ

ヌムの老年に対する考え方も、恐らくはそれを従容として受け入れるという考え方であるに違いなかろう。老化と死に対する思いについての諷刺は万人に当てはまるものであり、ここでの作者のメッセージは直接的である。そしてある意味で、このような静かで穏やかな死に方は理想的なものではあるだろう。だが、大多数の人間は生への執着を完全に捨てきれないのも現実である。このフウイヌム的な静かな態度に対する人それぞれの受け取り方は、各人で異なるであろう。だが、少なくともスウィフト自身にとっての理想的な死に方がここには表現されていると解釈して良いのではないだろうか。

II

ストラルドブルグやフウイヌムはさておき、ここで作品の他の部分に目を転じ、ガリヴァ本人についての老化の問題はどう描かれているかを検討して行こう。まずは、あたかもガリヴァを実在の人物であるかのように見なして、彼の年齢について作品中の記述から確認しておきたい。とは言うものの、作品のテキスト全体を通じ、ガリヴァの年齢はどこにも明示されていないのだ。Phyllis Greenacre は、"Gulliver was a few years older than Swift."と述べている。[5] だが、その根拠は今ひとつはっきりしない。そこで我々としては様々に推測する他ないということになる。作品の冒頭近くで、ガリヴァがメアリーと結婚したのが27歳だと記されており、その数年後に彼はリリパットへの旅にでかけたのだが、それが1699年だったということになっているから、第1篇「リリパット渡航記」の頃のガリヴァの年齢は、少し幅を持たせて考えて、30歳から40歳であろうか。合計16年余の航海を経て、フウイヌム国への渡航から英国に戻った1715年の頃は、ほぼ50歳前後になるであろう。その後の『ガリヴァ旅行記』の執筆を経て1726年の出版に至った時点で60歳程度と見なされる。

この推測を裏書きする情報が、初版に添えられたガリヴァの肖像画にあることも指摘したい。それは、楕円形の肖像画の下方あるいは周囲に添えられている英語とラテン語の次の語句である。'CAPTAIN LEMUEL GULLIVER OF REDRIFF. AETAT SUAE LVIII' 「レミュエルガリヴァ船長、レドリッフ在、年齢58歳」の後半部分にはローマ数字でガリヴァの年齢が明記されているのである。[6] 肖像画のこの添え書きがスウィフトの意思をどの程度反映しているかは定かでないが、上記のテキストからの我々の推測とは上手く符合する。『ガリヴァ旅行記』出版時点でのガリヴァの年齢は60歳前後と断定して良さそうだ。現在では、60歳は老人の部類ではないと言えるが、18世紀当時の60歳は立派な老人と言って良かろう。こういう訳で、執筆者が老人だということになれば、

文体が老人めいたものになっていたり、愚痴っぽくなっていたりと、老いの問題がいろいろな面でその人物の書いた文章には表面化しているはずである。

しかしながら、『ガリヴァ旅行記』の著者が老人であることになっていると言われても、我々読者としてはなかなか納得できないのではないだろうか。それどころか、描かれる登場人物としてのガリヴァは、『旅行記』全体を通じて大変若々しい印象を読者に与えるように描かれている。それは、ガリヴァの肉体的な活動についての描写において特に顕著である。例えば「リリパット渡航記」での大きな事件のひとつである、ブレフスキュの艦隊をひとりで引いて泳いで来る件や、彼の肉体的な活動が他の篇より多く語られる「ブロブディンナグ渡航記」での、ネズミや蜂との戦いの件などが、ガリヴァの若さの印象を強くする。『旅行記』執筆時の筆者としてのガリヴァの年齢が60歳近いという設定は、書かれたものには十分反映されていないと言える。あるいは、筆者が仮に老人であれば、書いたものに年齢が表れるはずだという考え方自体が間違っていると言えなくもない。

そんな中にあって、ガリヴァの行動の中に、彼の年齢を感じさせる事例があることを指摘したい。それは、「ブロブディンナグ渡航記」中の以下の箇所である。

> I was every Day furnishing the Court with some ridiculous Story . . . There was a Cow-dung in the Path, and I must needs try my Activity by attempting to leap over it. I took a Run, but unfortunately jumped short, and found my self just in the Middle up to my Knees. (II, vii, 112)
>
> (このようにして私は毎日のように何かしら事件を起こしては宮廷の笑いの種となっていた。・・・小道の途中に牛の糞が落ちている。ここはひとつ、見事に飛び越えて見せなくてはと心を決めた私は、助走を付けて踏み切ったが、残念ながら飛距離が足りず、ちょうど真ん中あたりに膝まではまり込んでしまった。)

この箇所で問題になるのは、ガリヴァが牛の糞の端の方を一寸だけ踏んでしまったという程度ではなく、その真ん中にずぶりと突入してしまったという点である。青年期や壮年期の高い運動能力をもった体ならば、自分の跳躍距離を判断するのにしくじったとしても、その誤差は少なくすみ、真ん中に落ちるということはまずないだろう。ところが、ガリヴァは目測を大きく誤り、牛の糞の真ん中に落ちてしまったのだ。彼は跳べると思った距離の半分しか跳べなかったことになる。それほどまでにガリヴァの身体能力は衰えていたということな

のであろうか。恐らくそうではないだろう。第2篇の頃のガリヴァは40歳前後であるはずだ。青年期は過ぎたとは言え、跳躍できる距離が以前の半分だけになってしまったということはないだろう。より正確に言えば、老人である書き手が、自らの感覚に基づいて記述した結果、本来なら跳び越せたはずのものが跳び越せなかったという記述をついしてしまったと言うべきであろう。勿論、ここで言う書き手とは、60歳の書き手ガリヴァと考えても良いし、それとほぼ同年代の真の作者スウィフトと考えても良い。いずれの場合も、老化してしまって衰えを見せ始めた自分の身体能力の基準で上記のエピソードを書いてしまったに違いないということである。

もちろん、この部分の解釈としては、『ガリヴァ旅行記』という作品全体に瀰漫している汚穢の表象の一例であり、作者の趣味の悪さの表出であるとすべきであろう。また、ブロブディンナグというある種のユートピア的な空間で、いかにも愚かで卑小な人物として諷刺の対象としての役割を果たすことを期待される人物として存在しているガリヴァがした滑稽な失敗談であるに過ぎない、という点をも指摘すべきであろう。即ち、作品の持つユーモラスな面をになうエピソードの一例として扱うべきものではある。ガリヴァ自身も言っているように、「宮廷に笑いの種をまいていた」訳である。また、「真ん中」という表現も単なる誇張表現であるという可能性もあろう。しかしながら、本論では、敢えてこれを、書き手ガリヴァの、あるいはもっと直接的にはスウィフト自身の、老人としての感覚のふとした現れとみなしたいのである。

また別の例を挙げよう。それは、ガリヴァが余暇にしばしば瞑想して過ごしたということになっている点である。彼は常に激しく動き回っているという訳ではないのである。活動的な若者や壮年の者であれば、恐らく瞑想などはせずにいると考えられる。もちろん、若くても瞑想好きであるということも大いにあり得るので、この件は漠然とした印象としてそうであるというに過ぎず、実際には強い証拠とはなり得ないのであるが、やはり、老人に特有の黙想癖を本来はまだ老人にはなってはいないはずのガリヴァにも、つい持たせてしまった、という事情が垣間みられるのではないだろうか。このように細かく見ていけば、〈書き手ガリヴァ＝老人〉説を補強する事例は他にもありそうではある。しかしながら、やはり全体的には、先にも述べたように、書き手ガリヴァは、登場人物ガリヴァと同様に、老人と見なすのは難しい。いずれのガリヴァに関しても、若々しい人物像が浮かび上がってくる。このことの背景には、この両者を区別することは簡単ではないという、この作品に内在する基本的な事情がある。

本来であれば、書き手ガリヴァは、語られる登場人物としてのガリヴァより、常に年長でなければならない。だが、作品全体を通じてそのような書かれ方に

はなっていず、書き手であるガリヴァは、航海中の任意の時点でのガリヴァと同じ年代であるかのようになっているのだ。言い換えると、行為者としてのガリヴァが、その場その場で、その時その時の自分の経験を逐次記録する書き手の役割をも同時に担っていると言えよう。四つの航海を終えて英国に戻った後の、既に老人になったガリヴァによって書かれたはずの『旅行記』の四つの篇は、実際には、それぞれの航海の直後に順を追って個別に書かれたという趣きになっている。あるいは、航海を経験するのと同時並行的に書かれたかのような内容になっていると言っても過言ではないだろう。結果的に、四つの航海を通じて、行為者であるガリヴァと同様に、書き手であるガリヴァも、その若さを保っているように見えるという訳である。

III

従って、本来老人であるはずの書き手ガリヴァの記憶力についても、老人らしい記憶の衰えなどは全く見られず、若い人たちが持っているような優れた記憶力を保ったままであることになる。ガリヴァは、再三、自分の記憶力を誇るかのような発言をしていることに注意しておきたい。それによると、単に若いというだけでは説明のつかない程の記憶力と、それに裏打ちされた語学力とを誇っているのだ。例えば、第１編冒頭では、“My hours of leisure I spent in . . . learning their Language; wherein I had a great Faculty by the Strength of my Memory” (I, i, 6)「余暇は外国語を学んだが・・・優れた記憶力のお陰で外国語を憶える能力が高い」と称しているし、第２編でも、グラムダルクリチに言葉を教わり、“in a few Days I was able to call for what I had a mind to” (II, i, 83)「数日のうちに必要なものを何でも頼めるようになった」と言う。“I could now speak the Language tolerably well” (II, i, 88)「今やこの国の言葉もかなり話せる」と述べたのが、首都に出向いた 10 月 26 日の日付がある部分であるが、上陸したのが６月であるから約４ヶ月でガリヴァはブロブディンナグ語をほぼマスターした計算になる。次の第３編では、ラピュタに来て間もないうちに言語を習得してしまう。“In about a Month’s Time I had made a tolerable Proficiency in their Language, and was able to answer most of the King’s Questions, when I had the Honour to attend him.” (III, ii, 156)「１ヶ月もすると、私はかなり流暢にこの国の言葉を話せるようになり、伺候した際には国王の質問にもほとんど答えられるようになった」とガリヴァは言う。一つ前の航海の時よりも言葉の習得の期間が短縮されていて、能力が更に向上しているかのようである。彼はまた、“I spoke *Dutch* tolerably well.” (III, i, 144)「オランダ語はかなり堪能」とも述べている。

その理由も後できちんと明らかにされる。"I had lived long in *Holland*, pursuing my Studies at *Leyden*, and I spoke *Dutch* well." (III, xi, 209)「レイデンに留学していてオランダ生活が長かったので、オランダ語は堪能」であるということだ。思い起こせば、確かにガリヴァはレイデン大学で２年７ヶ月にわたり医学を勉強したことになっていた。では、ヨーロッパの他の言語はどうだろうか。日常生活レベルにとどまるものであるのかも知れないが、彼の能力には瞠目させられる。以下は、ガリヴァが、リリパット皇帝との最初の会見に際して、いろいろな言語を試してみた時の模様である。

> His Imperial Majesty spoke often to me, and I returned Answers, but neither of us could understand a Syllable. There were several of his Priests and Lawyers present (as I conjectured by their Habits) who were commanded to address themselves to me, and I spoke to them in as many Languages as I had the least Smattering of, which were *High* and *Low Dutch, Latin, French, Spanish, Italian,* and *Lingua Franca*; but all to no purpose. (I, ii, 17)
>
> (皇帝はしきりにこちらに話しかけてくるので、私もこれに答えるのだが、お互いに一言も理解できない。近くに控えたお抱えの司祭や法学者たち（身なりから判断したのだが）も、皇帝に命じられ、口々に話しかけて来る。私はこれまでかじったことのあるすべての言語を駆使して、高地ドイツ語、低地ドイツ語、ラテン語、フランス語、スペイン語、イタリア語、リンガ・フランカを試してみたが、やはり何一つ通じなかった。)

ヨーロッパの諸言語がリリパット人に通じないのは致し方ないとしても、一介の船医にしては随分優秀な語学力であると言えるだろう。我々がこのリストに更に付け加えるべき言語としてもうひとつ、ポルトガル語も挙げておかねばならない。ガリヴァは、第４編「フウイヌム国渡航記」終結部分の重要人物である、ドン・ペドロ船長とはポルトガル語で会話をしているからだ。

以上、列挙したのは、どんなに僻遠の土地の言語であろうが、曲がりなりにもガリヴァと同じ〈人間〉の話す言葉についての能力であった。何より驚かされるのは、ガリヴァが人類ですらない〈馬〉即ちフウイヌムとも会話をすることができたという点ではないだろうか。"In speaking, they pronounce through the Nose and Throat, and their Language approaches nearest to the *High Dutch* or *German*, of any I know in *Europe*, but is much more graceful and significant." (IV, iii, 226)「彼らの言葉の発音は鼻と喉を使う。私の知っているヨーロッパの言語の中では高地ドイツ語に最も近いが、こちらの方が遥かに優美で表情豊かである」

と、ドイツ人たちが聞いたら憤慨しそうなことも彼は言ってのけるのだが、この箇所は、フウイヌム語もガリヴァはしっかりマスターすることができたことを如実に示している箇所であることは言うまでもない。

ガリヴァは行く先々で現地の人々と上手くコミュニケーションを取っているが、こうした彼の語学力は、それぞれ様々に異なる僻遠の地で生活を送っていく上で、必要不可欠なものであったに違いない。そして、語学力の基盤は優れた記憶力にあったはずだ。もし、ガリヴァが上記のような才能に恵まれていなかったとしたら、彼の経験は、全く異なったものになってしまったことだろう。何を言っても通じないような状況が長期間続けば、仮に日常生活は何とか送ることができても、皇帝や国王たちとの、フウイヌムであれば彼のマスターになった馬との、人類社会の諸相についての複雑な会話や議論が成立したはずもない。ひいては、『ガリヴァ旅行記』自体が成立したかどうかも疑わしいことになるだろう。極端な言い方をすれば、『ガリヴァ旅行記』全体が、語学の達人であるという設定のガリヴァ本人の記憶力に基づいて書かれたという建前になっていると言えるだろう。そして、これに付け加えるならば、フウイヌム語を学習した時に用いた手帳も重要だ。ガリヴァは記憶を助ける手段として筆記による記録を活用しているということである。『ガリヴァ旅行記』はガリヴァ自身の優れた記憶力、語学力と、それを補助する様々な記録文書とが集積されて成り立っているものだと言って良いだろう。[7]

IV

では、これほどまでにガリヴァが優れた記憶力を持っていることがしばしば強調されていて、あたかも『ガリヴァ旅行記』という作品自体が記憶力というものに執着しているようにも見えるのはなぜだろうか。それは、作品の根底には真の作者スウィフトの自分の老化に対する複雑な思いがあったからではないか。老化に伴って失われつつあったかつての記憶力の良さを懐かしむ気持ちが彼にはあったに違いない。前述のように、スウィフトはガリヴァをこの上なく記憶力の優れた人物として設定しているが、『旅行記』を成立させるためという表面的な理由の陰に隠された真の理由として考えられるのは、スウィフト自身の願望の反映がそこにあったということなのではないだろうか。

では、作者スウィフト自身について、自分自身の老年の抱える問題に関する考え方はどうだろうか。『ガリヴァ旅行記』は長年にわたり執筆されたものであるので、断定的な言い方は避けるべきだが、1726年末の初版出版の時点で1667年生まれのスウィフトは既に60歳に近い。ちょうどガリヴァがそうであったよ

うにスウィフト自身も老境にさしかかっていた訳だ。名目上の書き手ガリヴァと、真の作者スウィフトとは、同年代であり、共に老年期に既にさしかかっているという点で共通していると言えよう。スウィフトがガリヴァと問題を共有しているとすれば、表向きにはガリヴァが書いたということになっている事柄やその書きぶりには、スウィフトの本心が相当程度反映されたものになっていると判断しても良いのではないだろうか。その例が、先に取り上げた、牛の糞の跳び越し失敗の件である。作品全体において保たれて来た、ガリヴァ＝若者という設定を図らずも裏切る結果となった彼の跳躍の距離の短さには、自らの体力が衰えたことに対するスウィフト自身の実感と、事によると、自身のこれに類した体験とが込められているのではないだろうか。では、精神的な面での活動についてはどうだろうか。ガリヴァは、作品の最後で『旅行記』の執筆という営為について作品の最後で自らの感想を記している。

> I know very well, how little Reputation is to be got by Writings which require neither Genius nor Learning, nor indeed any other Talent, except a good Memory, or an exact *Journal*. (IV, xii, 284)
>
> (天分も、学問も、他のどんな才能も必要ない、優れた記憶力と正確な日誌だけがあれば事足りる、そんな著作で名声が得られるはずもないことは、私もよく分かっている。)

〈正しい記憶〉と〈正確な記録〉だけで書いたということだ。敢えて再び作者スウィフトと書き手ガリヴァを同一視して言えば、ここにも、両者の記憶力への思いが述べられていると解釈することができる。記憶と記録の違いはその永続性の有無にある。記録は不滅であるが記憶はいつかは失われる。記憶とともに人は生きるが、最後には記憶の質の高低や量の多少に関わらず、それとともに人は死ぬ。『ガリヴァ旅行記』という記録は残されたものの、ガリヴァもスウィフトも、彼らの持つ記憶とともに去った訳である。

〈記憶〉は所詮〈記録〉には勝てないのだろうか。そこで想起されるのが、ラガードの学士院で行なわれていた諸科学の内のひとつ、数式を覚える奇妙な方法である。以下のくだりは、数学という分野の異なる領域を扱ってはいるものの、記憶の大切さという点では先述の語学力と共通するものを持っている。

> The Proposition and Demonstration were fairly written on a thin Wafer, with Ink composed of a Cephalick Tincture. This the Student was to swallow upon a fasting Stomach, and for three Days following eat nothing but Bread and

Water. As the Wafer digested, the Tincture mounted to his Brain, bearing the Proposition along with it. (III, v, 178)

（まず、ごく薄い焼菓子に頭脳チンキを配合したインクで命題とその証明を書く。絶食により胃袋を空っぽにした学生がそれを呑みこみ、それから３日間はパンと水だけで過ごす。すると、薄焼菓子が消化されるにつれてその命題とともに頭脳チンキが頭に上がって行くのだという。）

頭脳チンキや焼菓子の組成などは残念ながら謎のままである。そして、この研究所の他の研究と同様に、この試みも毎回失敗してしまうものである。だが、もし可能であればこの方法は何とも簡単で便利な記憶術であろうかと思わせる点で大変興味深い。一義的にはこの箇所は、世間一般には難しい事柄を記憶せねばならないような状況があり、その状況下にある人々がいかに大変な苦労するものであるかという件についての諷刺だと解釈できる。あるいは、人は楽をしようとしても結局はうまく行かないものであり、何事も地道にするのが肝心だということを述べているとも解釈できる。この研究は、数学の命題を憶えるためという限定付きであるが、これを世の書物全体に広げて考えれば、もし本当に頭脳チンキのようなものがありさえすれば、日々辛い思いをしている記憶力のなさが解決し、読書をする楽しみも損なわれないのに、という作者の願望が込められているとは言えないだろうか。ただしその場合の難点は、数学の命題がメモ用紙１枚に収まるのに対して、書物１冊を憶えようとすれば一体どれ程の量の焼き菓子を食べねばならないかちょっと想像がつかないという点だが。いずれにしても、冗談めかした形ではあるものの、このような形で記憶術を提案している背景には、作者の記憶に寄せる思いが窺われると言って良いのではないだろうか。

V

以上の考察においては、ガリヴァの書いたものとして『旅行記』を扱いながら、書き手ガリヴァと真の作者スウィフトとを、時には区別し、時には同一視して扱って来た。言うまでもないことであるが、ガリヴァはスウィフトのペルソナに過ぎないのであるから、あくまでも両者を区別して考える必要がある。だが、真の作者とそのペルソナが一体どの程度一致し、どの程度ずれているか判定することは難しい問題であり、時と場合によると言わざるを得ない。本件に関する限り、結果的には両者はかなりの部分が重なっていると言うことができるだろう。Robert P. Fitzgerald も次のように述べている。

We may assume that Swift, like Gulliver, could learn and had learned from experience, and that in writing this section of the *Travels* he could look back upon the enthusiasms and yearnings of his younger years with a kind of tolerant amusement. [8]

(ガリヴァと同様、スウィフトも、経験から学べたし、実際学んだのである。そして、『旅行記』のこの箇所を書くにあたって、彼は若かりし時の熱情と切望とをある種の寛容なおかしみをもって振り返ることができたと言って良いだろう。)

両者が共に楽しんで若い時代を振り返ったかどうかは定かでないが、ストラルドブルグ体験を共有している点は確かだと言って良いだろう。

『ガリヴァ旅行記』を書いた後、スウィフトは、まだまだ旺盛な文筆活動を続けている。1729 年にはあの『控えめな提案』*A Modest Proposal* が出版された。1735 年にダブリンで出たフォークナー版の著作集の準備にも関わっていたであろう。スウィフトならではの諷刺精神の発露とも言うべき 1739 年出版の『スウィフト博士の死』*Verses on the Death of Dr. Swift, D.S.P.D.* では、自分自身の死の知らせを受けた周囲の人々の反応を滑稽に描いてもいる。しかし、時が経つにつれ、スウィフトはストラルドブルグにますます似てきてしまう。晩年のスウィフトに関する J. Paul Hunter の次の記述の内容は、いささか誇張表現の嫌いはあるが、事実をほぼ間違いなく伝えているものだろう。

His health was deterioration and his creative, intellectual, and *mnemonic* powers beginning to slip, or at least wobble. The Ménière's Syndrome which had begun to affect his balance . . . began to take larger tolls, and Swift's later life was one of increasing discomfort, discontent, disillusion, and (ultimately) madness or something close to it. (イタリクス筆者) [9]

(彼の健康は悪化し、創造力、知力、記憶力が衰え始めた。あるいは、少なくともそれらがぐらつき始めたのだった。彼の平衡感覚を損なわせていたメニエール症候群が、更に重くのしかかって来たのだった。そして、スウィフトの晩年は、嵩じて行く不快と不満と幻滅と、究極的には狂気、ないしそれに近いものの人生だったのである。(傍点筆者))

多くの評者が言うように、彼の迎えた人生の終幕は皮肉としか言いようがない。

では最後に、人生において避けられない死を、ストラルドブルグについて再

び考えてみよう。永遠の生命を課せられながらも、永遠の若さは与えられることなく、かえって絶えず老化し続けるストラルドブルグこそ、自らの生と死を深く考え続けたはずではないだろうか。彼らが持つ解決法は、恐らく二つしかない。一つは不慮の事故死であり、もう一つは自殺だ。だが、両者とも作品中には言及されていない。特に自殺に関しては、第六戒「汝、殺すなかれ」にあるようにキリスト教では厳に禁じられたものであることもあり、元々作者の念頭にはなかったか、あっても書くのを避けた事柄であったと考えられる。ごく簡潔に言えば、「キリスト教では、人は神の意志によって造り出されたもの、それゆえに人のいのちは神のもの、という考えがあり・・・神に属するいのちを勝手に破壊してはならない、というのが基本的な考え」なのである。[10] このような事情により、はっきりとは書かれてはいないのだが、ストラルドブルグもほぼ間違いなく自殺を考えたに違いない。そのことは以下の記述に漠然と示されている。"He said they commonly acted like Mortals, till about Thirty Years old, after which by Degrees they grew melancholy and objected, increasing in both till they came to Fourscore." (III, x, 204)「30 歳あたりまではストラルドブルグも普通の死すべき人間と同じように振まっているのだが、それを過ぎると次第に憂鬱になり、元気がなくなって行き、80 歳になるまでそれがひどくなる一方である」というのである。ストラルドブルグにとっても死は恐怖であろうから、自殺するのも簡単なことではないであろう。そして、なかなか死ねないうちに憂鬱な時が過ぎ、更に老化が進んでしまった後は、彼らはもはや自殺すら考えなくなるということではないだろうか。だからと言って彼らが諦観の境地に達するかと言えば、そんなことは全くない。最後まで醜い姿のままであり続けるという点こそが我々に恐怖を起こさせる。ストラルドブルグこそ、諷刺という目的を達するための創作に過ぎない仮構の存在であるとはいうものの、文学史上希有の老醜の権化であると言うことができよう。そして、彼らのような人生を始めから避けられる我々〈死すべき人間〉は、よほど幸せである、と言えば素朴すぎるであろうか。

結び

ある意味では幸運な我々〈死すべき人間〉が作品から何か前向きなメッセージを得ることができないか、ということについて最後に考えてみたい。ガリヴァがストラルドブルグの実像を知らされる前に思い描いた夢が、我々の生き方の参考にならないだろうか。ガリヴァの夢想の前提は永遠の若さであったから、彼の予定では 200 年で大富豪になり、次には大学者になる。最終的には国を導

く賢者になってやろうという、まさに夢物語のような、愚かとも言うべきものであった。ところが、残念ながら我々には永遠の若さは与えられていない。だが、考えてみれば、200年でなく20ー30年ほどでなら、富豪になる可能性は我々にもある。大学者になるのは無理でも、並の学者にはなれよう。世の中のいろいろな面に関する記録も、可能な限り蓄えることができれば、国を導く賢者にはなれずとも、残した記録（記憶ではなく記録だという点が重要だ）自体は、後世の人々の役に立つだろう。このような限定を付けて考えさえすれば、ガリヴァによって述べられた夢にはそれぞれに可能性が秘められていると言うことができる。問題は、我々自身、限られた可能性をいかに見極めてそれを実現して行こうとするかにかかっているということだ。各人がそれぞれの能力の範囲内で十分に活躍した上で、自分の能力を超える事柄に関しては、他人や次の世代の人たちに任せるという心構えを持つことこそが必要だと言える。先程、我々はガリヴァを愚者呼ばわりしたが、以上のように考える時、彼の言い分にも評価すべき点を見いだし得るのである。Alexander Popeは次のように述べている。"All forms that perish other forms supply,/(By turns we catch the vital breath, and die)"「すべて死に行くものは、他のものを補充する。（我らは交互に生の息吹きをとらえ、死ぬのだ。）」と。[11] 我々がここで述べられたような境地に至るのは、難しいことのように思えるが、決して不可能事ではない。そのようなことを我々に考えさせる契機が、ストラルドブラグを扱った箇所には秘められている。『ガリヴァ旅行記』という作品は、その雑多で多様な要素の中に、こうした死生観や諦観について読者に再考させ、自分の生き方を振りかえらせる要素をも間違いなく備えていると言い得るだろう。

註

1　ジョナサン・スウィフト『ガリヴァ旅行記』第4篇、第5章、241頁。テキストはJonathan Swift, *Gulliver's Travels* (Oxford: Oxford UP, 1998)を用い、以下の引用は、本文中の括弧内に、篇、章、頁数の順に記す。翻訳は、山田蘭訳『ガリバー旅行記』（東京：角川書店、2011年）を参考にした。

2　スウィフトの蔵書について詳しくは、Dirk F. Passmann & Heintz J. Vienken, *The Library and Reading of Jonathan Swift: A Bio-Bibliographical Handbook* (Frankfurt am Main: Peter Lang, 2003), Part 1, Vol. 2, pp. 999-1005 を参照。

3　ユウェナーリス、藤井昇訳『サトゥラェ――諷刺詩』（東京：日中出版、1995年）232 頁。引用文中の「呆け」の読み方は「ほうけ」が一般的であると

思われるが、「呆」の字には「ぼ」とルビが振られており、いわゆる「ボケ老人」を想起させる訳文となっている。

4 四方田犬彦『空想旅行の修辞学：『ガリヴァー旅行記』論』（東京：七月堂 1996 年）280 頁。

5 Phyllis Greenacre, *Swift and Carroll: A Psychoanalytic Study of Two Lives* (New York: International Universities Press, 1955), p. 63.

6 楕円形の肖像画の下方、四角いプレートに英語とラテン語の語句が見られるのは 1726 年の所謂 A edition に掲載された first state の肖像である。その後の AA edition でも同じ内容の語句が肖像画の周囲に見られるが、字体が大文字に変えられ、よりくっきりとした形になっている。下方の四角いプレートには代りにペルシウスのモットーが記されている。これは、所謂 second state の肖像である。両方の肖像は、Norton 版（2002）の *Gulliver's Travels* (pp. 473-74)で見ることができる。また、『ガリヴァ旅行記』の初期の版本の異同に関して、詳しくは下記を参照。H. Teerink & A. H. Scouten, *A Bibliography of the Writings of Jonathan Swift* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1963), pp. 192-99.

7 『ガリヴァ旅行記』において記録文書が果たす役割に関しては、拙論、「『リリパット渡航記』における「文書」について」を参照。

8 Robert P. Fitzgerald, "Swift's Immortals: The Satiric Point," *SEL* 24 (1984), p. 495.

9 J. Paul Hunter, "*Gulliver's Travels* and the later writings," *The Cambridge Companion to Jonathan Swift*, ed. Christopher Fox (Cambridge UP, 2003) p.236.

10 久野牧『キリスト教信仰Q＆A』（札幌：一麦出版社、2009 年）、127 頁。

11 Alexander Pope, *An Essay on Man* (Epistle III-I) in *Alexander Pope*, ed. Pat Rogers (Oxford: Oxford UP, 1993), p. 290. ポウプ著、上田勤訳『人間論』（東京：岩波書店、1950 年）、書簡三(一)、60 頁。

参考文献

Swift, Jonathan. *Gulliver's Travels*. Ed. Paul Turner. Oxford: Oxford UP, 1998.

---. *Gulliver's Travels*. Ed. Albert J. Rivero. New York: W. W. Norton, 2002.

Fitzgerald, Robert P. "Swift's Immortals: The Satiric Point." *SEL* 24 (1984).

Greenacre, Phyllis. *Swift and Carroll: A Psychoanalytic Study of Two Lives*. New York: International Universities Press, 1955.

Hunter, J. Paul. "*Gulliver's Travels* and the later writings." *The Cambridge Companion to Jonathan Swift*. Ed. Christopher Fox. Cambridge UP, 2003.

Passmann, Dirk F., and Heintz J. Vienken. *The Library and Reading of Jonathan Swift: A Bio-Bibliographical Handbook*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2003.

Pope, Alexander. *An Essay on Man. Alexander Pope*. Ed. Pat Rogers. Oxford: Oxford UP, 1993.

Teerink, H., & A. H. Scouten. *A Bibliography of the Writings of Jonathan Swift*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1963.

スウィフト、山田蘭訳『ガリバー旅行記』東京：角川書店、2011 年。

久野牧『キリスト教信仰Ｑ＆Ａ』札幌：一麦出版社、2009 年。

ポウプ、上田勤訳『人間論』東京：岩波書店、1950 年。

山内暁彦「『リリパット渡航記』における「文書」について」、『言語文化研究　徳島大学総合科学部』第 4 巻、1-36 頁、1997 年。

ユウェナーリス、藤井昇訳『サトゥラェ―諷刺詩』東京：日中出版、1995 年。

四方田犬彦『空想旅行の修辞学：『ガリヴァー旅行記』論』東京：七月堂、1996 年。